

カラリング競馬

須田智博



受賞のことは

初エッセイでの入賞でした、という恐ろしい人がいる。毎回、脱帽したくなる作品を仕上げていつも上位にくる人がいる。予選を通らなかつた年も、応募自体を諦めた年もあった自らを並べるのもおこがましいが、毎年必ず書いてきたから今日は言っても許されるだろうか。「ここに集う皆さんをずっと同志だと思っています」。書きたい競馬がまだまだある。今後もひっそりと書き続けます。それをお伝えして感謝に代えさせてください。

プロフィール

1970年静内生まれの函館育ち。須賀川市在住。犬派。馬券下手。2015年に次席いただきました。山河拓也さんと軍士門隼夫さんに私淑する身の程知らず。競馬好きの皆さんと福島の酒で一杯やりながら語り合うのが夢。

東日本大震災と、その後福島に起こったことについては今も多く語る気にはならない。この10年間、既にたくさんの人がいろんなことを言い、書いてきた。当事者としては今更わざわざ思い出したい記憶でもないし、上手く伝えられる言葉が私にあるとも思えない。

重い話になるのは勘弁だけど、かといって相手に軽く扱われると心が閉じる。

だから、一つの事実として述べるだけなのだけど。

二〇一一年の春からしばらく、福島県を敢えて訪れる人はほとんどいなかった。

まるで日本地図からそこだけが真っ白に消されてしまったように、あの時フクシマは、食材の産地としても、観光の目的地としても「存在してはいけない場所」だった。

これは、そんな色のない秋に出会った彼の話だ。

福島県の、それほど有名ではない街のそれほど大きなもない神社の境内はその日も閑散としていた。10月の爽やかな陽射しの下、参道には倒れた石灯籠が復旧の目処もたたないままゴロゴロといくつも転がっている。神職の私は、誰も来るあてのない御守授与所で競馬雑誌を読んでいた。

こんな時勢でも、競馬はちゃんと続いていた。それほど

ころか、ドバイではヴィクトワールピサが快挙を成し遂げ、国内ではオルフェーヴルが春二冠を獲得していた。

負けるな、日本！と言わんばかりの優勝たちの活躍の度に感涙し、何とか気力を奮い立たせる、そんな日々だった。

鳥居の奥に人影が2つ、並んで見えた。かなりゆっくりとした歩みで参道を進んでいるようでもなかなか姿が判然としなかつたが、どうやら男女、腕を組んでいるようだ。：恋人たちだろうか。そっとしておこうと、再び手元の雑誌に目を落とし、しばらくすると、声がかかった。「御守、いいですか」

先ほどの2人だった。はい、と顔をあげた私ははっと息をのむ。恋人だと思った2人は20代と思しき息子と、その母だと一目で知れた。そして、息子さんの方は手に白杖を持って黒いサングラスをかけていた。

歩行の介助だったか。早とちりした自分を少し恥じながら私は彼らが御守を選ぶのを手伝う。お母さんが、あらこれ黒くてカッコいいわね、と手に取った御守を見て、私が

「あ、それは勝ち守と言って勝負運を引き寄せる御守です」

と言った時だ。息子さんが嬉しそうに「それって競馬にもご利益ありますか」

と聞いたのだ。

「もう、すぐそういうこと言ってる。すみませんね。この子競馬大好きで……」

と言いかけたお母さんの言葉を今度は私が遮った。私も実は競馬、好きでして。今もこっそりほら、とカウンスターの下に隠した雑誌を見せかけ、あ、しまった、見えない方になんてことを、と思う。彼は特に気にする様子もなく、あはは、と声を上げて笑った。

「オルフェーヴル、三冠取りますかね」

間違いないでしょう、と答えた私に頷いた彼は母親に聞き直して、ねえ、先に街での用事を済ませてきてよ、僕はここで少しお話ししてるから、と言った。でも、ご迷惑じゃないですかと母親がこちらを見るので、どうせ暇をしてたところですよ、と答えた。それに私の方も彼と馬の話をしてみたい気持ちになっていた。木陰のベンチに彼を誘った。

誰も来たがらないこんな時期に福島を訪ねてくれた礼を述べると、

「目に見えないものを恐れては僕なんか生きていけないですからね」

屈託ない笑顔に、だんだん私の質問は凶々しくなる。そもそも、競馬はどのように楽しむんですか。

「音声を聞いているから、だいたい皆さんと楽しみ方は同じですよ。でも、大外からピンクの帽子が飛んでくる！ って言われてもそれはよくイメージできない。あはは」

視覚障害の方にとって、赤とか青は例えばトマトの色や空の色、として知識の中に根付いている、と聞いていた。「そうなんですけど、空の色は日によって違うし、もつと言えばその日の気分によっても違って見えるそうじゃないですか」

私ともだった。
私は色づき始めたモミジの葉の間に見える空を見上げた。青、であるはずの空は、三月以来ずっと色を失ったままだ。

「だから、オルフェーヴルは栗毛、だとか金色に光る馬、って教えられるより」

「教えられるより？」

「美しくてうっとりするような毛色、って教えてくれると嬉しいんです」

話は弾んだ。生まれた時から見えないのだという彼の記憶力は凄まじく、その知識に私は何度も舌を巻いた。現役条件馬の血統背景から昔の伝説の馬の話まで、彼の話は広がり続ける。

「レキシントン、って名馬が19世紀のアメリカにいたんですよ」

意図が掴めずに話の先を促すと彼はにっこりと笑顔を見せた。

「その馬、盲目だったんですって！」

えええー？

「ああ、もちろん競走馬の時は見えてたらしいんですけど、段々両方見えなくなって引退したんです」

私はその場でスマホで検索をかける。レキシントン。1850-1875。種牡馬としても大成功したが、今、はもう直系としての血脈はほぼ終わっていた。

「サイアーラインは、もう途絶えちゃったんですね」
以前は確かに存在していたものが、今は消えてしまっている。今のここ福島みたいなと情けない自嘲がこみ上げる。

ははは。乾いた笑い声を立てた私を訝しんでる様子の彼に、いや、実は最近この土地が日本地図から白く塗り消されたように思えちゃって、と、一言告げた。あくまで軽く、重くならないように。

「いいじゃないですか、白」

びっくりしたように彼は言った。

「僕の持つてる白杖、どうして白いか知ってます？ これ、周りからちゃん認識してもらえように、なんです。イギリスのジェームズ・ビッグスさんが考案したと言われています。この白は僕たちにとっては、みんなに僕たちはここにいますよ、って主張する色、安心をもたらす色」

それに、と彼は付け足した。白は、輝きの色って視覚支援学校では習いましたよ。
光り輝くような声だった。

駐車場に車の音をして、お母さんが帰ってきたようだった。

先ほどは情けないことを言ってますませんでした。私は詫び、楽しい時間を過ごせたことへの礼を述べた。気持ちばかりですが、と神社オリジナルの桜をあしらった御守を差し出すと、

「僕、桜花賞が一番好きなんです！」

とても喜んでくれた。

「阪神競馬場ってその季節、桜が咲いていてとても綺麗なんですってね。名前もいいですよ、桜花賞。阪神の桜の花はどんな色ですか」

少し考えて私は、ほっとする色ですと答えた。毎年、

その時期がちゃんとやってきたことを知らせる、柔らかな風によく似合う色。

いつか桜花賞を見に行きたいな、と彼は呟き、そうだとこちらを向いた。

「いつか福島がちゃんと復興したら一緒にどうでしょう」

「どのくらいかかるかな」

と苦笑いしながら答える私。

：10年くらい？

「では、10年先の桜花賞をどこかで一緒に見ましょうか」

「いいですねー」

勿論、互いに、社交辞令に過ぎなかった。

個人的な連絡先を交わすこともなく、彼は迎える母親と一緒に次の目的地へ向かっていった。

これで彼の話は終わりだ。

その後私と彼の人生は一度も交わることはなく、時が過ぎていった。

福島は復興に邁進し、観光客も少しずつ戻ってきた。山々の深い緑、広がり抜ける青い空、季節を彩るカラフルな野菜、果物、そして花々。色を取り戻しつつある福島で、私は神社の立て直しに腐心した。

今は参道も綺麗に修復され、授与所には御朱印を求める参拝者が今日も訪れる。

ところで、震災から10年目の桜花賞。ゴールを先頭で駆け抜けたのはソダシだった。馬群のどこにいても、私はここ、と強烈に主張する純白は自信に満ちて日の光に輝き、多くのファンを魅了した。

どこかできっと見ていたであろう彼に感謝と共に伝えたい。

白は、わくわくする色だ。